

奨学生レポート（最終）

埼玉県・オハイオ州スカラシップ事業（機械工学系）の平成 23 年度奨学生として一年間、アメリカ・オハイオ州のフィンドレー大学に留学させていただいた上野裕太と申します。

午前中は大学で英語を学び、午後は、ニッシンブレキオハイオで機械工作の研修をさせていただきました。フィンドレー大学の学生達とだけではなく、ニッシンブレキオハイオの社員の人達と関係を築くことができました。また、多くの事に積極的にチャレンジすることで学んだことは、数えきれないほど多くあります。

この最終レポートでは、一年間を通して学んできたことや経験したこと、また、その経験から感じたことをお伝えしたいと思います。

授業

フィンドレー大学には、アメリカ人学生以外にも多くの留学生がいました。午前中は、IELP(大学の英語学習施設)で中国、台湾、サウジアラビア、ベトナム、イタリア、ペルー、メキシコ、日本から来た学生達と毎朝、英語を勉強していました。その中には、日本に非常に精通している学生やそうでない学生もいて、授業中、お互いの国について話し合いの場が設けられた時に、日本の紹介をするのが非常に楽しかったのを覚えています。



大学のクラスメイトと先生

クラスメイトの全員が学ぶことに対して貪欲で、授業中疑問があると、先生が話している途中でも質問をし、納得するまで質問し続けます。時には、学生達が質問をし続けるので、授業時間のほとんどが質問の受け答えで終わってしまうということもありました。

授業が終わった後、アメリカ人の友達にその話をしたら、アメリカでは、授業中、学生達が先生の言ったことに対して疑問があれば、納得するまで質問し続けることはあたりまえの習慣だということを知りました。

日本の大学では、学生達が質問するという事はほとんどなく、先生の授業の邪魔になるので質問をしてはいけないというような雰囲気もありますが、アメ

リカでは授業中に学生達が積極的に先生と対話をするので、学生と先生の関係は非常にいいです。

アメリカ人はコミュニケーション能力が高いという話は、よく聞く話ですが、ディスカッションの多い授業や積極的な学生達の授業態度などからも、その理由がわかります。

その国の教育はその国の文化を反映させるといいますが、授業を通して、様々な国の学生達の積極的な意見応酬の中に混じってみて、外国人の押しの強さは日本人のはるか上だと実感しました。今後は、ここで学んだ積極性に加え、英語で状況に応じた冷静さを合わせ持った議論ができるようにもっと努力が必要だと感じました。



大学のクラスメイト達と

ニッシンブレキオハイオ

クーラント(冷却液)をリサイクルし、会社に利益をもたらすことがプロジェクトの課題でした。クーラントをリサイクルする為に必要な機器の購入は、他社のアメリカ人達とメールでやり取りをし、見積もりを出してもらい、購入の許可を上司から得るという段取りでした。アメリカ人とビジネスの場で直接やり取りをする経験を重ねていくうち、どんな些細なことでも疑問点があったら、すぐに質問するという意識が体に染みつきました。会話の中で聞き逃しがあると致命的になる場合もあるからです。

また、アメリカでは計画を立てる前に行動ということがしばしばあり、行動に移すまでの時間は日本に比べるととても早いです。逆に、日本に比べ企画立案が十分でなく正確性に欠けているため、失敗することもあります。それでも「個人の行動力」を尊重する文化はとても心地よかったです。



会社では、日本人駐在員とアメリカ人社員が共同で仕事をすることも多く、将来海外で働くことを希望する一人のインターン生として、アメリカ人と日本人のコミュニケーションや働き方から多くのことを学び取ることができる非常に良いチャンスでもありました。

アメリカ人の多くは、家族との時間を大切にし、また清掃活動などのボランティアに参加している人も少なくないということを聞きました。そのため、定時になればほとんどのアメリカ人が帰宅します。一方で日本人社員は、残業することがしばしばあります。アメリカ人の日本人に対するイメージは「仕事が人生」で、家族との時間を犠牲にしてまで仕事をする日本人をよく思わないというアメリカ人もいました。日本人社員は、会社に貢献し、仕事の知識を身に付け、家族の為にお金を稼ぐためには残業は仕方がないという考えを持っていますが、大半のアメリカ人は、なによりも家庭との時間を優先します。仕事と私生活のバランスの取り方の重要性についてアメリカ人社員達と話し合ったことが何度かありましたが、日本人とは異なった仕事に対する価値観を学ぶことができ、それが「自分の将来の理想的な生活とは何か」を熟考するきっかけになりました。仕事と家庭のバランスの取り方については、これから考えていかなければいけない大きな課題ですが、日本人の仕事に対する価値観も尊重していきたいです。

ソフトボール

夏の暖かい季節になると、大学のソフトボールチームと会社のソフトボールチームに所属し、アメリカ人達と交流を楽しんでいました。こちらでは、野球よりもソフトボールのほうが人気が高く、大学付近の球場でも毎日ソフトボールの練習が行われています。ソフトボールと言っても、日本で主流のファストピッチ（投手が下投げで速い球を投げる形式）ではなく、スローピッチ（投手が下投げで遅い球を投げる形式）が主流でした。こちらでは、男女一緒にプレーする co-ed のトーナメントと男女で区別されているトーナメントの二種類があります。私は、男女混合と男子だけのどちらのチームにも所属していましたが、このソフトボールを通して多く学び取ることができました。

日本では、硬式、軟式野球、または、ファストピッチのソフトボールが主流で、どちらかという打者に打たせないようにと、守りを重視します。ピッチャーは速球、変化球を投げるため、経験者以外の人が出場してプレーすることは非常に難しいです。しかし、アメリカで主体のスローピッチでは、ピッチャーはだれでも打てるような遅い球を投げるため、ソフトボールや野球経験者以外の人達もチームの輪に入っていくやすく、また男女関係無くプレーできるので多くの人達が楽しむことができます。日本で野球をしていたことがある私は、最初のうちは、そのスローボールを簡単すぎるのではないかと甘く見ていましたが、始めてすぐに、奥の深さを実感しました。打撃面では、ピッチャーが投げる球が遅いので、力強く打たないとボールが遠くに飛ばなく、守備面で

は、三振をする人はほとんどないので、頻繁にボールが飛んできます。経験者はボールが飛んできそうな場所を守るのですが、予想以上にボールが飛んできて休む暇がありません。また、経験者はできる限り、未経験者を助けなければいけないので、未経験者がエラーした後の処理も任せられます。チーム全員が自分の役割をしっかりと持って、その役割に応えれば全員が「グッジョブ！！」と声を出し励まし合う雰囲気はとても心地良く、みんなで楽しめるこの「スローピッチ」を日本でも広めていきたいと強く感じました。



日本人学生との付き合い方

アメリカに留学しに来る日本人学生のほとんどが、英語や異文化を勉強することを優先目的とし、「できるだけ英語でアメリカ人としゃべらないと」や「日本人と距離を置いて行動しなければ」ということに頭がいっぱいだと思います。私もその中の一人でした。

しかし、こちらで生活しているうちに、フィンドレーの地で巡り合わせの中で出会えた日本人達とのつながりも大切にしていきたいという感情が湧いてきました。



日本人学生とのベースボール観戦

こちらに来た当初は、できる限り日本語に触れないようにしていたため、日本人から遊びの誘いを受けても断って、アメリカの友人や別の国の友人とばかり行動を共にしていました。しかし、そうしているうちに、日本人の自分が日本人を避けているということに違和感を覚えてきました。国外の人とのつなが

りを大切にするために勉強し始めた英語がきっかけで、日本人とのつながりを疎かにしていたという事実に気づき始めました。日本で会っていたら間違いなく素晴らしい友達になれる人達が、アメリカで出会ったがために良い関係を築けないというのは、おかしなことだと気づき始めたのです。

しっかり状況を把握して、やるべきことをしっかりしておけば、日本人学生との付き合いは悪いことではなく、むしろ付き合うべきだと思います。楽しく健康でバランスのとれた留學生活を送れたのも、日本人の仲間達のおかげでした。

幼いころからの夢であったアメリカでの留學生活が終わりました。

一年間、様々な国から来た人達と実際に接してきたことで、本当の意味でお互いの文化を尊重し、わかり合う努力をすることの大切さがわかりました。

特にアメリカは、日本のように以心伝心で通じてしまう文化ではないので、自分の思ったことを伝え、わからなかったら質問をするということをしなくて曖昧にしていると相手を困惑させてしまいます。自分の思ったことを率直に言うことの大切さを心に留めながら生活しているうちに、自分の中の束縛が解け、より開放的になることができたと思います。

決して楽しいことばかりの留學生活ではなく、大変なことや、つらいこともありましたが、すべての経験を通して自分を成長させることができた一年間は、非常に充実していて中身の濃いものでした。

最後に、この機会を提供して下さった皆様、また私を支えて下さった方々に感謝の気持ちを述べたいと思います。本当に一年間どうもありがとうございました。



